

ウィリアム・カーティスの『ロンドンの植物』

—自然と分類学のあいだ—

石倉和佳

はじめに

ウィリアム・カーティス (William Curtis, 1746-1799) の名は、現在も発行が続いている『ボタニカル・マガジン』(Curtis's Botanical Magazine, 1787-) の創刊者として主に記憶されている¹。18世紀後半、園芸の大衆化と並行して登場したこの雑誌は、彩色図版の付いた植物学の啓蒙雑誌がイギリスで普及する道筋をつけたものとして重要である。『ボタニカル・マガジン』に続いて、リンネ協会を設立したジェームズ・エドワード・スミス (James Edward Smith, 1759-1828) が、植物画家であったジェイムス・ソワービー (James Sowerby, 1757-1822) と『英国の植物』(English Botany, 1790-1813)の出版を始めた。またそれに続いて、当時出版された中で最も独創的な植物図版本の一つと評価されているロバート・ジョン・ソーントン (Robert John Thornton, 1768-1837) の『フローラの神殿』(The Temple of Flora, 1799-1807) が出版された。これらは良く知られた代表的なものであるが、当時の植物画や植物学の人気を良く示している。

『ボタニカル・マガジン』はカーティスに商業的な成功をもたらしたが、その原型であり、彼の代表的な著作ともいえるものは、1775年から出版された彩色図版付植物図鑑の『ロンドンの植物』(Flora Londinensis, 1775-1798) である。これは大部のフォリオ版の書籍であり、購買者を事前に募ってカーティスの生前に6巻発行された。ロンドン近郊に自生する植物を網羅することを

意図したものである。

『ロンドンの植物』の図版の美しさは知られたものであり、『ボタニカル・マガジン』も人気を博したものであるが、これらの出版物に比して、カーティスの人生や業績が現在においてもよく知られているかといえそうとは言えない。カーティスの伝記的研究はヒュー・カーティス (W. Hugh Curtis) によるもの以外まとまったものがなく、同時代を生きた彼の友人たちは断片的な逸話を残しているが、彼自身の親族についての情報さえ、実は十分整理されてはいないのである²。しかしカーティスが残した仕事から、彼が植物と出版とを取り持つ重要な場所にいた人物であることは確かであり、その業績が園芸家や出版者としてのみならず文化史的な側面から評価されるべきであることも明らかである。確かなことは、植物の知識がどのように文化資産としてのステイタスを得ていくのかについて、カーティスの薬剤師、育種家、園芸家、出版者としての活動を通して知見を得ることができるという点である。以下には、ウィリアム・カーティスの人生と業績について考察し、18世紀イギリスの植物学や園芸、また植物書の出版についての様々な状況を確認するとともに、植物学の研究がカーティスにとってどのような同時代的リアリティを持ったものであったのか、合わせて分析していきたい。

1. ウィリアム・カーティス—ロンドンに出るまで

1746年、カーティスが生まれたのはハンプシャー州のオールトン(Alton)である³。彼の家族はクウェーカー教徒であった。オールトンの町にクウェーカー教徒が住み始めたのは17世紀の半ばごろと考えられるが、1689年の信仰自由令 (Act of Toleration) 以降、定期的に集会を行えるようになった。オールトンは古くから市の立つ町として栄えたところであり、カーティスの父ジョンは皮なめし業(tanner) を営み、裕福な家であった。書籍、鞆、小物、馬具など日常に使う様々なものに利用されていた皮革は、非常に重要な材料、素材であったといえる。カーティスの家系には、薬剤師になったものもあり、時代が下ると医者や博物学者などもいた。クウェーカー教徒としてのネットワークを生かし、カーティスの家族や縁者の多くは、何らかの教育を受けて専門的な技能を生かした職業に就いていた。カーティスが後に出版することになる『ロンドンの植物』の装丁は、しっかりとした革張りの大部なものであるが、薬草や植物に関する事柄と書籍の制作に関わる材料は、カーティスの家庭環境にあったと考えてよいだろう。

カーティスはエグガー・グラマー・スクール (Eggar's Grammar School) に通い、14歳になると祖父のジョン・カーティスの元に薬剤師の見習いに入った。この頃、近所で馬屋を営むトマス・レッグ(Thomas Legg) という人物を通して、植物学の基本を知ったという逸話が残っている⁴。しかし故郷の町では、それ以上植物学を学ぶ機会にはなかったようである。カーティスは1766年、20歳のとき、ロンドンに出た。最初、外科医であるジョージ・ヴォー(George Vaux) の見習いとなり、そのあとクウェーカーでシティの薬剤師であり薬局を営むトマス・タルウィン(Thomas Talwin) の見習いとなった。カーティスはこの薬局を継いだが、シティの薬剤師の仕事は良く儲かるものであったにも関わらず、短期間で店を売り払ってしまった。彼はロンドンに出てしばらくの間に、自分の将来の仕事を見定めていた。庭を作り、

植物研究をし、出版するのである⁵。このような計画を立てることは、クウェーカーのネットワークがなければ実現できるとは思われなかったと考えられる。

カーティスが生まれた18世紀中葉は、17世紀の宗教的迫害の時代を過ぎて、クウェーカー教徒たちの多くが各種産業に従事しイギリス社会で安定した地位を築いていた。彼らは刑罰法 (いわゆるpenal law) によって、公職や聖職に就くことができなかった。カーティスの家族に見られるように、彼らの多くは技能を伴う専門職となり、薬剤師や博物学者も多かった。クウェーカーの間では、植物学は特に推奨されたということであるが、それは自然の事物—鉱物から植物、動物まで—を研究することが信仰に叶うものと考えられていたからであった。自然を前にして虚心に観察するとき、人間は「内なる光」(inner light)に導かれて啓示を得るのであり、このような姿勢で自然の探究をすることは彼らの道徳に沿ったものと考えられたからである⁶。また、ウィリアム・ペン(William Penn, 1644-1718) がアメリカのペンシルベニア州に、各国に点在していた非国教会徒を呼び寄せたことで、アメリカにおけるクウェーカーのコミュニティも成立していた。18世紀前半、イギリスのクウェーカーたちは、アメリカとのつながりによって交易をおこない、金融業も行った。クウェーカーの人々は、このように職能を生かして中には資産家になる者もいた。アメリカにおける植物学上の知見をイギリスに持ちこむ仲介役として活動した植物学者にピーター・コリンソン(Peter Collinson, 1648-1768) がいる。また、医師でありアプトン(Upton)に当時もとても珍しく高価な植物を集めたといわれた庭園を造ったジョン・フォザギル(John Fothergill, 1712-1780) などもそういった人々である。その他にもジョン・バートラム(John Bartram, 1699-1777) など、カーティスが活動する以前に、英米における多くのクウェーカーが植物学の研究に寄与している⁷。

2. カーティスと18世紀後期の植物熱

1771 年、ジェームス・クック船長 (James Cook, 1728-1779) によるオーストラリアやニュージーランドを廻る世界一周の旅から帰国した28歳のジョセフ・バンクス (Joseph Banks, 1743-1820) は、ロンドンでたちまち有名人となっていた。バンクスと同行した博物学者でカール・フォン・リンネの弟子であったダニエル・ソランダー (Daniel Solander, 1733-1782) とともに、国王に謁見したが⁸、若くて王となったジョージ三世は、その後もしばしばバンクスと会い、二人は永く交友することになる。王室には、ジョージ三世の信頼厚い家庭教師であり後に首相となったジョン・スチュアート、ビュート卿 (John Stuart, 3rd Earl of Bute, 1713-1792)と、ジョージ三世の母、オーガスタ (Augusta) がいた。ビュート卿は植物学に通じており、オーガスタ妃はキュー (Kew) にあった所領地を庭園に改造していた⁹。バンクスは後にジョージ三世から実質的なキュー植物園の監督者としてその管理をまかされることになる。キュー植物園はバンクスの手で植物研究のメッカとなり、その後バンクスはオーストラリアを始め各地にプラントハンターを送り出した。1778年にバンクスは王立協会 (Royal Society of London) の会長となるが、彼の影響下、ロンドンで話題になる趣味や教養の一つに、いままで以上に植物学が意識されてきた、と考えても不思議ではない。

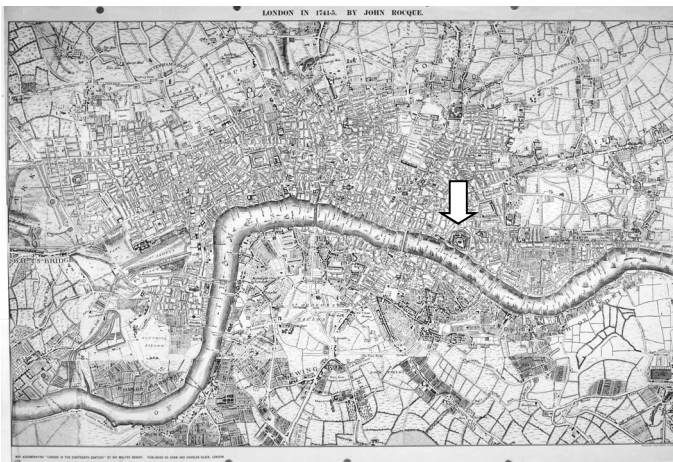
カーティスはバンクスと同世代であるが、二人の人生も活動も属する社会階層が異なるためまったく違うように見える。しかし彼らは、18世紀後半のイギリスでの植物研究や植物趣味を異なった形ではあるが代表しており、植物学を通しての交流もあった。バンクスが科学的研究を奨励し資源としての植物採集を国家的利害と結び付けて推進したとすれば、カーティスはイギリスの園芸文化や植物研究の大衆化を、出版文化を通して方向づけたといえる。カーティスが20歳でロンドンに出たのは1766年であるが、同年バンクスは若くして王立協会の

会員となり、植物学の勉強に専心している時期であった。バンクスは母の屋敷がチェルシーにあり、チェルシー植物園にはしばしば通っていたとも言われる。同時に、当時大英図書館の司書をしていたソランダーからリンネ分類学を学び、バンクスは博物学全般にも詳しくなっていた。カーティスの植物の知識は古くからの薬草学を基礎としたものであり、これはバンクスも同様であるが、バンクスのリンネ分類学の吸収は、後年リンネとの交流やリンネの弟子たちを受け入れることにも発展する。ヨーロッパの植物分類学における一つの新説であったリンネ分類は、その後19世紀になるまでイギリスにおいて圧倒的な支持を得ることになるが、これはバンクスがソランダーを通して、リンネ分類に精通していたことも影響していると見てよい¹⁰。

カーティスは薬剤師としてシティで働くことをやめ、育種や薬草学を学ぶ菜園を経営することを考え、1770年代の初め、テムズ川南岸のグランデ通り (Grande Road) に小さな薬草園を開いた。これはバンクスが世界一周の旅から帰ってきた時期である。この時期、カーティスは聖トマス病院 (St. Thomas Hospital) の薬草学の講師や、チェルシー植物園 (Chelsea Physic Garden) での植物講義などを行っている。当時聖トマス病院の医師であったジョージ・フォードイス (George Fordyce, 1736-1802) は、薬草学の知識の重要性を説き、カーティスはフォードイスの講義を助けて植物の説明に当たっていたという¹¹。大地主の息子でオックスフォード大で学んだバンクスと、クウェーカーの家族に生まれ薬剤師見習いから始めたカーティスとでは、住む世界が違うとも言えるが、植物学においては、彼らは相互に補完する立場にあったといえるかもしれない。

カーティスが初めてロンドンで菜園を開いた頃の様子について、『ジェントルマンズ・マガジン』の追悼記事には、次のように書かれている¹²。

カーティス氏は時折植物学の講義を行い、ロンドン近郊の野原や林に彼の生徒を連れて行った。こういった遠足より楽しいものは他にあり得ない。夕食のときには、道すがら集めた植物が提示され説明された。とはいえその説明は、カーティス氏の気質において常に一番顕著であった、ユーモアのセンスによって活気づいていたのである。



1745年のロンドンの地図 (Mitton (ed.), *Maps of Old London*より) 上が北真中を流れているのがテムズ川、矢印の場所がロンドン塔、その西側で川の北の地域がシティである。ロンドン塔対岸の南西部(Grande Road)に最初の植物園があった。川が南北に折れ曲がる部分の東側に広がるのがLambeth Marshである。カーティスはここに広い地所を得て植物園を移転する。最後は地図の西端で川よりのBrompton地域のQueen's Elmに移った。地図の白いところは放牧地や草地であり、18世紀中葉のロンドンは郊外に広い緑が広がっていたことが分かる。ただしロンドンの稠密化は、19世紀に近づくにつれ確実に進んでいった。

Mr. Curtis for some time gave public lectures in botany, taking his pupils with him into the fields and woods in the neighbourhood of London. Nothing could be more pleasant than these excursions. At dinner-time, the plants collected in the walk were produced and demonstrated; but the demonstration was enlivened with all that fundamental humour which was always uppermost in Mr. Curtis's disposition.

(*Gentleman's Magazine*, 69(1799), 636)

カーティスがロンドンに出た頃、市街地の外にはまだ草地や畑が広がっていた。その後数十年でロンドンは驚くほど都市化し人口密度が高くなるが、カーティスのロンドンは田園を楽しむことのできる場所であった¹³。カーティスの植物研究は、目の前に生える草に注意を向け、その草の用途や効用を知り、その草の生育を見る、という実践的な姿勢が基本にある。この点についても、ロンドンがまだ牧歌的な風景を残していた時代の生活環境を思い起こす必要があるだろう。

3. 『ロンドンの植物』 (*Flora Londinensis*)

カーティスは、菜園を営み植物学の講師として活動する傍ら、『ロンドンの植物』の出版を開始した。カーティスが図版の制作を頼んだ画家には、その後植物画家として名を成した者も多い¹⁴。1775年、『ロンドンの植物』の最初の分冊が発行された。カーティスは収録された植物画の美しさを損なわないために、各図版には頁をつけないようにした。これは全巻揃った際に、リンネ分類に従ってページを並べ替え、再度製本しなおすことが前提となっていることにも対応している¹⁵。庭や草地から植物を学ぶこと、それを絵画として精密に写し取ること、そしてその植物に関する植物学上の知識がコンパクトにまとめられていること、これらはカーティスの中ではこの植物事典の主旨として把握されていたようである。但し、この立派なフォリオ版の植物図鑑は、植物観察の際に持ち歩くことはできず、庭師や一般の園芸家がたやすく手に入られる値段ではなかった。当時の書評には、高価であることに加えて、描かれている植物はデンマーク王室が編集した『フロラ・ダニカ』(*Flora Danica*)と同じものが多いこと、植物名や植生、形状を示すのにラテン語での説明を毎ページ付けていることに不満の意が読み取れる¹⁶。一般の読者が求めていたのは、ラテン語で注釈が書かれた学術的な書作ではなく、英語の植物名と平明な説明であったと考えられる。

カーティスの『ロンドンの植物』の様々な要素を全体的

に考えて見えてくることは、贅沢な装丁や上質の紙、非常に精緻な植物画、ラテン語での説明など、上流趣味に応じて学術的、芸術的な完成度の高さを求める意欲が見られる一方で、薬用や農業や各種産業における植物の用途といった実利的な情報を書きこむ実用書としての内容を備えている点である。上昇志向と実践思考が合体した形であり、極端に言えばミスマッチな要素が一つにまとめられている。書籍の体裁は上流文化の調度品といった趣であるが、植物図鑑としての内容は庭師や薬剤師、地所を自分で管理したい中小の土地所有者などの用途に合ったものである。非常に贅沢な印刷物に、ロンドン近郊に自生するいわば地味で目立たない植物が次々と登場するのである。『ロンドンの植物』に見られる、一定の地域の植物をすべて網羅するという考えは、すでにデンマークの『フロラ・ダニカ』にある。ただしカーティスの『ロンドンの植物』は、『フロラ・ダニカ』のように国土や国境を意識して、そこに生育する植物を網羅するものではない。各植物の説明個所に彼自身が当該植物を自分で探しに行ったといった記述が散見することにも示されているように、植物採集、植物観察に歩くことがいわば前提となっている。居住地から徒歩や簡単な乗り物で行ける範囲内の植生に特化しているわけであるが、このように彼自身の生活範囲の植物に関心を向ける姿勢は、古くからの薬草学の実践態度とつながるものだろう。

この本の予約購読者には、ビュート卿やバンクス、その他大勢の上流の人々を始め、銀行家のデヴィッド・バークレイ(David Barclay, 1729-1809)を始め多くの有力なクウェーカーの人々がいた¹⁷。また、先にあげたフォーダイスやジョン・ハンター(John Hunter)など有力な外科医を含む多くの医師(surgeon)や、薬剤師の名前も目につく¹⁸。出版者はカーティス本人であり、全部で三百冊ほど販売されたと言われているが、制作費に購読料が追いつかず、経済的には失敗であった。カーティスはこの本を1790年代まで発行するが、ロンドン近郊に生育する植物を網羅するという当初の予定を完遂することな

く終わっている。

1787年、カーティスは植物画の彩色図版と植物の説明を掲載する『ボタニカル・マガジン』の発刊を始めた。これは一般向けの小型版の雑誌で、イギリスでの生育に限らず海外のエキゾチックな花々も広く紹介する方針で編集されたものである。植物名は英語でまず示され、学術名等の記載は短く、植物についての説明も短くなっている。文字による一ページの説明に彩色植物画が付いているこの体裁は、『ロンドンの植物』のものを簡易化したものである。『ボタニカル・マガジン』の発刊からほどなくして、前述したように、スミスとソワービーが同様の植物雑誌『イギリスの植物』(*English Botany*)の発刊を始めた。カーティスから見れば、自分が作り上げてきた植物図鑑のノウハウをスミスに取られたようなものであり、その後カーティスは一切リンネ協会ともスミスとも交流しようとしなかった。こうした確執はともかく、このような彩色図版付きの植物雑誌が次々と発刊され一般に流通することで、読者は様々な植物の知識を得ることになり、それは園芸のすそ野も広げることになった。見方を変えれば、カーティスの出版事業は、園芸が消費文化に取り込まれる時代が始まったことを示す出来事だったともいえる。

次には『ロンドンの植物』の具体的な記事を検討したい。一例として、イギリス自生のヒナギク(Common Daisy)の彩色図版と記事をとりあげる。図版には植物の全体が根から花まで細密に描かれている。また、根の詳細や花の形状の細かな部分が別に描き込まれている。これらの点は『ロンドンの植物』の図版全てに踏襲されている。花と葉のバランスが非常に良くとられて、絵画としても鑑賞できる。カーティスの説明は次の通りである。

ヒナギクを水かミルクに混ぜて飲むことを勧める著者もいる。運動をして血が熱くなった時に冷たい水を飲んで消耗性の熱が出た場合である。ドイツのいくつかの地方では、ヒナギクをゆでて香味野菜として肉と一緒に食べるとも言われているが、薬としても

食用としても人間にはさして良いものであるとは思われない。羊と馬はヒナギクを食べない。そしてほとんどの家畜は喜んで食べることはないようだ。もし土地を持っているならエナメル敷きの草地¹⁹にするのに使ったり、ヒナギクを散らして敷き詰めたりしても良いだろうが、こうした植え方はほとんど理解されないか試されることがないようだ。地元の農業経営を考える者としては、このようになかなかこの花を悪く言ってきたわけであるが、それにもかかわらず我らがイギリス詩人の父は惜しめない賞賛をこの花に送っている。



BELLIS PRENNIS Common Daisy

Flora Londinensis, vol.1. plate 62

The Daisy has been recommended by some writers to be given in hectic fevers, caused by drinking cold water when the blood has been heated by exercise, either infused in water or milk.

In some parts of Germany, it is said to be boiled and eaten with meat as a pot-herb; but it does not seem to promise much either as physic or food for man. Sheep and houses refuse it, and it is very probable that none of our cattle eat it willingly; if so the owners of lands pay dear for their enamelled meads, and daisied carpets, but this part of husbandry seems as yet little understood or attended to. As rural oeconomists we have ventured to say thus much in dispraise of this flower, notwithstanding the lavish encomiums the father of our English poets has vestowed on it...

(*Flora Londinensis*, vol.1 “Common Daisy”)

さて、この説明の中で他の草花の記事にも同様に見られる内容を挙げれば、薬用や食用の利用方法や利用法として報告された記録のあるものを記載していること、家畜のえさになるかどうか、特別な利用法や園芸での利用法などが言及されていること、である。「エナメル敷き」に植えるなど、園芸の手法として興味深い言及も見られる。薬用、農業利用、食用などの実用的な側面が細かく記載された後、カーティスは「我らがイギリス詩人の父」、すなわちジェフリー・チョーサー(Geoffrey Chaucer, ca.1343-1400)に言及し、彼がヒナギクを称賛した、として詩行を引用している。

今日の日の娘と呼ばれる特別なもの、

ヒナギク、白と赤の花

フランス語では麗しのマーガレットと呼ばれる

おお、素晴らしい花よ

[A Ballade]

In special one called Se of the daie

The Däisie, a floure white and rede,

And in french called La bel Margarete

O commendable floure, &c.—

草地に生える花の中でもあの白と赤の花を

私は最も好きなのだ

私たちの町のデイジーと人が呼ぶような

[The Legend of Good Women, Prologue]

—Above all flouris in the mede

Than love I most those flouris white and rede

Such that men call in Daisies in our Town.

(Curtis, *Flora Londinensis*, vol.1, plate 62) ²⁰

ヒナギク、Daisyは、Day's Eye、すなわち「その日の瞳」から来ている。光がさすと花を開く性質によるものと思われる。この花の名の由来はチョーサーに帰されることが多い²¹。これに加えてカーティスは、ヒナギクが光とともに花を広げ、光がなくなると花を閉じる種の草であることを、チョーサーがおそらく初めて記述したようだと指摘している²²。カーティスの植物の解説には、このように文学への言及がしばしば見受けられるが、これは彼がこの本を、18世紀のいわゆるお上品な文化(polite culture)の嗜好品ともなるべきものとして考えていたこともあるだろう。カーティスの人文的教養が、ギリシャ、ローマの古典に裏打ちされたものではなかったとしても、『ロンドンの植物』にはしばしば、英語の詩歌の引用がなされている²³。例えば、ヒアシンスに似た 英国ヒアシンス (Hyacinth english) という花の説明では、巻き髪の様子を「ヒアシンスのような髪」 (“hyacinthine hair”)と表現することについて、ホーマーの英訳とミルトンから引用をしている (“and hyacinthine locks/ Round from his [Adam's] parted forelock manly hung/ Clustering” Book IV, ll.301-303)²⁴。そして、カーティスは次のように述べる。

植物学と文学とのつながりを指摘したいという欲求のために、しばしばこうした示唆や所見を敢え

て述べることをするわけであるが、学のある読者であれば、こうした試みが、この本の嵩高さとほとんど何も加えず、値段のうちにも入っていないことを大目に見ていただけるだろうと思っている。

A desire to point out the connection between botany and polite literature, has occasionally induced us to venture on hints and remarks of this kind, which the learned reader will, we hope, look on with an indulgent eye, and remember that our attempts, such as they are, add little to the bulk, and nothing to the expence[sic], of the work.

(*Flora Londinensis*, vol2, plate 18, “Hyacinth English”)



Flora Londinensis, vol2, plate 18, Hyacinth English

カーティスの謙遜とともとれるこうした文言は、この本の購読者に名を連ねていた人々を思い浮かべてのことかもしれないが、文学の中に植物の描写を見つけてそれを覚えておくこと、そして植物を考える際に文学作品の表現を思い浮かべることなどは、罪の

ない楽しみである、という点については共有されている認識であろう。カーティスの文学に言及するこうした姿勢には、科学研究を科学的な論理のみで捉えるのではなく、感覚や感情と結びつけていることを示している。

4. ランベスの植物園とその後

カーティスにとって薬草の知識を使うことや植物学を追求することは、実際には趣味ではなく仕事であった。とはいえ彼の面目は、経済的に不自由のない薬剤師の職をすてても、植物研究や植物図鑑の出版を自らの仕事としたところにある。そのような中で、『ロンドンの植物』の刊行は、非常に上質の植物図鑑をイギリスで発刊したという名誉をカーティスにもたらしたが、出版事業の継続とともに彼の経済状況は苦しくなっていたようである。1777年、『ロンドンの植物』の刊行を始めて間もなく、カーティスは『ロンドンの植物』の購読者の一人である、トマス・フラン克蘭ド(Sir Thomas Frankland, 1750-1831)に手紙を送っている。薬剤師の仕事はすっかりやめて、本の完成に全力を尽くしたいと伝えているのだが、フラン克蘭ドを通してバンクスに援助を頼んでいるところを見ると、予約購読者以外にも経済的な援助者を探していたとも受け取れる²⁵。

翌年、カーティスは、さらに広い土地をもとめてランベス(Lambeth Marsh)に移り、新たに植物園を作った。彼はその植物園を「ロンドン植物園」(London Botanic Garden)と名付け、「趣意書」(*Proposals for Opening by Subscription, a Botanic Garden, to be Called the London Botanic Garden*, 1778)を配って会員を募り、実践的な植物学を教える場として運営する形をとった²⁶。バンクスはこの植物園の会員となり、苗や種を寄付したという²⁷。彼はまた、併設の図書館を設けて会員が自由に閲覧や学習ができるようにした。この植物園は、薬剤師や医師のみならず一般の園芸愛好家にも開かれたものであった。1787年から発行が始まった『ボタニカル・マガジン』が彼

に利益をもたらすようになるまで、植物園からの収入が彼の生活を支えたようである²⁸。彼はのちにランベスからブロンプトン(Brompton)に植物園を移したが、図書館も同様に移設された。当時ロンドンには一般に開かれた植物園や図書館はほとんどなく、その意味でも先進的な試みであったと考えられるが、同時に当時のロンドンに暮らす人々のニーズに応えたものであったと言える²⁹。

カーティスの図書館には同時代の植物学に関する書籍がぐまなく集められていた。特に、リンネ植物学に関連する書籍が中心であったようである。興味深いのは、18世紀の博物学の書物のなかで最も読まれたものの一つ、ビュフォン(Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon, 1707-1788)の『博物誌』(*L'Histoire Naturelle*)が所蔵されていなかったという点である³⁰。前述したように、当時のイギリスはリンネ分類学の受容が非常に進んでいた時期であった。一方で、ビュフォンは『博物誌』の序文などでリンネ分類を攻撃し、人工的な分類法に強く懐疑的な態度をとっていた³¹。カーティスが特にリンネの崇拝者であったという記録は残っておらず、ビュフォンの『博物誌』がないことの具体的理由は定かではないが、彼の図書館の蔵書の傾向は当時のイギリスの植物学の流行に合わせた書籍を揃えていたということだろう。『ロンドンの植物』に掲載されている植物分類は、リンネおよびリンネ以外の植物辞典や植物学書に載っていた学名を網羅しているが³²、リンネ分類に合わない植物の実態などについても詳述している³³。このような図鑑の内容構成はある意味でリンネ分類を相対化しているものと受け取ることもできる。とはいえ、カーティスの仕事は積み上げられてきた植物学の知識を整理し必要ところは修正するところに留まっており、ビュフォンのような植物分類に対する一種の攻撃的ともいえる懐疑は全く見られない。ビュフォンは、完全な植物体系を求めて分類学を極めようとする学術的な営為を、昔の錬金術師が「賢者の石」(philosopher's

stone)を探し求めるように不可能なものを追い求めているのと同じであると述べた³⁴。カーティスにはこうした、自然の真理を求めるような、またその不可能に対して省察するような形而上的な傾向はない。

それでは彼自身は植物学の探求についてどのように述べているのか。ランベスの植物園の利用者を募る「趣意書」の中に、カーティスの考えが示されている箇所がある。カーティスは、植物学には有用性と楽しさがあり、学問の中で「実用と娯楽が非常にうまく混じり合ったもの」(“the *utile dulci* is so intimately blended,” 4) だと言う。また、自然を観察し自然を学ぶことが神の意に通ずるとして、次のように述べる。

植物学というのは、最も博学な人によって、そしておそらく医学者の中で最も卓越した教授たちによって練磨されてきた科学である。ここで、知を愛するものとして、我々は全能の神の美しい作品を称賛し熟慮するのだ。いかに限りなく神の知が示されているのかを、植物の成長と繁殖の様々な様態に見て取ることができる。

It[Botany] is a science which has been cultivated by the wisest of mankind, and particularly by the most distinguished professors of the medical art. Here, as philosophers, we may admire and contemplate the beautiful works of an almighty being. What an infinite display of wisdom, is observable in the different modes of the growth and propagation of plants!(4)

『ロンドンの植物』においてもそうであるが、彼の植物学は、ルネッサンス期以降、本草学、植物学、博物学の重要な著作を良く吸収し、そこでの分類法を尊重し、実際に目の前にある植物と対話する形を取っていると言えるだろう。彼は植物に関する学問を通じて人間の知の歴史とつながっていると考えているのであり、同時に今目の前にある自然の美しさに神の存在を感じているのである。カーティスは次

のように続ける。

簡単に言えば、好奇心が強い、もしくは黙想を好むようなタイプの心をもった人は、純粋な喜びの尽きることがない源を植物に見つけるだろう。あたかも、別の世界が、彼の目の前に開けるのだ。新しい観察の手段を通して、彼は自然の^{おもて}面を見つめる。そして一般の人々にとっては単なる白紙に過ぎない、その本を読むことが出来る卓越した喜びを持つのである。

In short, a mind that is of an inquisitive or contemplative turn, will find in plants, an endless source of innocent amusement. Another world, as it were, opens to his view. He beholds the face of nature through a new medium of vision, and has the superior pleasure of being able to read in that book, which to the generality of mankind is a mere blank. (5)

ここでは、自然は本であり、その本を読むリテラシーは植物学である。そしてその「本」を解釈し、意味を汲み取り、心で感じるのは人間である。分類学は手段であるということになるのであるが、ビュフォンが問題にしたように、植物分類は人間の生み出した概念に過ぎず自然そのものに分類体系を原理化するようなものはない、といった視点は全くない³⁵。カーティスの自然観は、いわゆる自然神学の流れと近いものである³⁶。そして、彼にとってその基盤は、幼少期からのクウェーカーとしての信仰があったと考えられる。

カーティスの植物研究や植物園の運営は、クウェーカーの人々に多く助けられたものであるが、彼自身は1791年にクウェーカー教会からは脱会している。17世紀、非国教会徒として迫害を受けたクウェーカー達は、黒い衣服を着て、信仰にかなった習慣とともに暮らした。話し方においてもそうであった。二

人称の単数もしくは複数を表わす“you”は、生まれや身分が上である人に向けて使われるものでもあったため、「あなた」と二人称の単数を表す時は、どのような場合でも“thou”や“thee”を日常会話で用いた³⁷。こういった人間の階級を表す表現を拒絶する姿勢は、彼らの抵抗のあかしでもあった。18世紀の後半になっても、そのような生活習慣を保持している人々も中にはいたようである。クウェーカーは教団としての発展よりも個人の内面性を重視し、教団の拡張や信者の増大を政策としてほとんど実行しなかったこともあり、18世紀を通してイギリスのクウェーカー教徒の数は減少し続け、最盛期の半分程度の2万人以下になっていた³⁸。前述したように18世紀になると様々な産業に従事し社会的に成功するものも出ている。そのような人々はクウェーカーの集団内の結束よりもイギリス社会への同化に向かう傾向があっただろうと考えられる。こうしたことを鑑みると、ロンドンで植物学の出版者として、また植物園の運営者として多くの上流の人々とのつながりのあったカーティスが、教会を脱会したことはさして不思議ではないようにも思える。

しかし、クウェーカーとしての習慣や教会活動を殆どしなくなったとしても、カーティスが保持していたものは、自然を前に黙考し、神を知る信仰の形であったのではないだろうか。カーティスの植物研究の事例は、自然神学の伝統が強いイギリスにおける、科学研究の一形態である。ビュフォンが自然の本質に何があるかを問い、統一的な原理ではなく個別の生物の様態の限りない可変性に意味を強く見いだそうとするとき、例えばリンネの提示した分類学は人工的な虚構となるだろうが、カーティスにとってはどのような人工的な分類学を利用しても、おそらく自然に所与のものとして備わっている神性が損なわれることはないという信念が、彼の植物研究を幸福な営みへと導いていたと考えられる。

本研究はJSPS科研費基盤B26284042の助成を受けて行われた。

¹ カーティスの名を冠した『ボタニカル・マガジン』の商業的成功は、カーティスの後を引き継いだ娘婿のサミュエル・カーティス(Samuel Curtis, 1779-1860) やジョン・シムズ(John Sims, 1749-1831) の努力もあるが、その後編集を引き継いだキュー・ガーデン(Kew Gardens)の監督者となったフッカー (Sir William Jackson Hooker, 1785 -1865)の影響も寄与している。

² William Curtis 1746-1799 参照。カーティスのいとこの William は医師(Surgeon)であったが、Chawton でジェーン・オースティン(Jane Austen, 1774-1817)の診察をしている。

³ カーティスの人生については、Robert Hunt, rev. by K. G. V. Smith, “Curtis, William,” *Oxford Dictionary of National Biography* に簡潔な記事がある他、*Gentlemen's Magazine*, 1799の追悼記事およびWaterhouse “Botanist”の中の言及などがある。この他、Cantor, 98-100, Dewis, 41を参考にした。

⁴ *Gentleman's Magazine*, 69(1799), 635.

⁵ カーティスがこのような計画のための資金をどこから得たかという事は明確ではないが、*Gentleman's Magazine* の記事を総合すると、すでにロンドンに出て数年で、薬剤師としての仕事と店の売却によってかなりの資産を得ていたと考えられる。

⁶ Cantor, 233-238参照。

⁷ Cantor, 159-165参照。バートラムはコリンソンと文通を行い、アメリカ自生植物の種子などをイギリスに送っている。王立協会の重要なメンバーであったコリンソンはバートラムの手紙を *Philosophical Transactions*に掲載し、ジョージ三世の植物学者として推挙するなど、バートラムの活動を補佐した。Frank N. Egerton, “Bartram, John,” *Oxford Dictionary of National Biography* 参照。

⁸ O'Brian, *Joseph Banks*, 148-149 参照。

⁹ オーガスタ妃とキュー植物園については、Desmond, 27-64 参照。

¹⁰ バンクスの青年期については、John Gascoigne, “Sir Joseph Banks,” *Oxford Dictionary of National Biography*に簡潔な紹介がある。

¹¹ *Gentleman's Magazine*, 1799, 635-36.

¹² この記事には署名がないが、Cantorによればこれを書いたのは、カーティスの後を次いで『ボタニカル・マガジン』の編集にあたった、John Sims (1749-1831) である(99)。

¹³ とはいえカーティスは後に、Lambeth Marshの庭に植えたアルプス原産の草花が、汚れた空気が流れ込むために枯れてしまったという報告をしている。Waterhouse, “The Botanist,” 505 参照。18世紀後半にはすでに、石炭の煙などの害が出始めていたのが分かる。

¹⁴ James Sowerby (1757-1822), William Kilburn (1745-1818)などがいる。

¹⁵ *Flora Londinensis*, Vol.1 preface. 本論文で引用したものは、Biodiversity Heritage Library HPにあるスミソニアン図書館に所蔵されているものである。

¹⁶ *Critical Review*, 1777, 291-292.

¹⁷ バークレー家は銀行家として財をなした一族である。その他同じく銀行家のガーニー(Bartlett Gurney)やハーフォード(Joseph Harford)もいた。

¹⁸ Curtis, *Flora Londinensis*, vol.1 “The List of Subscribers”参照。

¹⁹ 短く刈った芝草などの下草の中に、少し背の高い花を付ける小さな花を広く植えて、上側が色で染まったように見せる植え方。“enamelled mead”という用語は、20世紀以降はつかわれないうである。現在では、自然派の庭づくりの一つの手法として捉えられている。Woudstra, “The Enamelled Mead”参照。

²⁰ チョーサーからの引用については、Chaucer, *The Works*, 556, 338も参照のこと。

²¹ *OED*によると、Daisyの初出は1000年ごろのAelfric glossary である。チョーサー以前にも、すでに使われている語である。古い綴りとして“dayesye” “deysie”などがある。*OED*の注釈には次のようにある。“OE. day's eye, eye of day, in allusion to the appearance of the flower, and to its closing the ray, so as to conceal the yellow disk, in the evening, and opening again in the morning.”

²² “The Legend of Good Women, Prologue”にある。*Works*, 339 参照。

²³ *Flora Londinensis*, vol2, plate 18, Hyacinth english の解説部分参照。ミルトンのテキストはMilton, *Paradise Lost* である。

²⁴ ヒアシンスの比喩については、Milton, 213参照のこと。なお、ここで“hyacinthine”と言われているヒアシンスの喩えは、カーティスの取り上げた“hyacinth english”とは異なる種のものに関連する。それらの種を厳密に特定することは難しいが、カーティスも*Flora Lodinensis* の同項で述べているように、“Hyacinthus orientalis”、いわゆる一般にヒアシンスとして知られているものに近いと考えられる。

²⁵ Dawson, *Banks Letters*, 343 参照。

²⁶ Noblett, “William Curtis's Botanical Library”にカーティスの植物園に併設された図書館についての詳細がある。

²⁷ Noblett, “William Curtis's Botanical Library,” 21参照。

²⁸ *Gentlemen's Magazine*, 636参照。

²⁹ Noblett, “William Curtis's Botanical Library,” 21-22参照。

当時は貸本屋が各地に作られていた。ロンドンでは同時代に博物学書を揃えた図書館としてLondon Libraryが設立されていた。Brewer, 176-181およびKaufman, 17-23参照。

³⁰ Noblett, “William Curtis’s Botanical Library,” 16. Noblettは、カーティスがビュフオンの書籍を収蔵していないことについて、“This latter [Buffon] omission is really quite extraordinary, for Buffon’s multi-volume *Historie naturelle* is one of the most influential scientific works of the eighteenth century.” と述べている(16)。尚、ランベスの植物園が開園したときには、W. Kenrick によるビュフオンの『博物誌』の英訳(1775)が出版されていた。

³¹ Lyon, “The ‘Initial Discourse’ to Buffon’s *Hitorie naturelle*: The First Complete English Translation.” 135-136およびSloan, “The Buffon-Linnaeus Controversy”参照。ビュフオンは生物の種は本質的に人間の作り出した概念であり、自然は観測しえないほどの微細な差異および漸次的変化や、個々の生物の相互のつながりによって成り立っていると考えている。花のおしべとめしべの数で花の種類を分類しようとするリンネ分類は、その機械的な分類法のためにビュフオンの自然観とは明確に相反するものであったといえる。

³² John Gerald, John Parkinson, John Ray などの著作に加えて、Albrecht von HallerやWilliam Hudsonのものなども参照されている。

³³ たとえば、*Flora Londinensis*, vol6, plate 16 “Primrose”の項では、リンネがPrimrose とCowslipを同種としている点について、カーティスは修正を加えている。

³⁴ ビュフオンの『博物誌』の序文にあるものである。Lyon, 151に英訳がある。

³⁵ Lyon, 134-135参照。

³⁶ Willey, *The Eighteenth Century Background*, Ch.1 参照。

³⁷ クウェーカー教徒の言語使用については、Quaker Speak, Thomas Hamm, “The Histoy of Plain Speech,” およびMaxfield, “Quaker ‘Thee’ and Its History”を参照。

³⁸ Cantor, 23.

<参考文献>

- Brewer, John. *The Pleasures of the Imagination: English Culture in the Eighteenth Century*. Chicago: University of Chicago Press, 1997.
- Cantor, Geoffrey. *Quakers, Jews, and Science: Religious Responses to Modernity and the Sciences in Britain, 1650-1900*. Oxford: Oxford University Press, 2005.
- Chaucer, Geoffrey, *The Works of Geoffrey Chaucer*. Ed. John Urry. London, 1721.
- Critical Review*. "Flora Londinensis." 44, 1777.
- Curtis, William. *Flora Londinensis*, 6vols. London, ca.1775-1798.
- . *Proposals for Opening by Subscription, a Botanic Garden, to be Called the London Botanic Garden*. London, 1778.
- Curtis, W. Hugh. *William Curtis 1746-1799, Fellow of the linnean Society, Botanist and Entomologist*. Winchester: Warren and Son, 1941.
- Dawson, Warren R. (ed.) *The Banks Letters: A Calendar of the Manuscript Correspondence of Sir Joseph Banks*. London: British Museum, 1958.
- Desmond, Ray. *The History of the Royal Botanic Gardens of Kew*. London: Kew Publishing, 1995.
- Dewis, Sarah. *The Loudons and the Gardening Press: A Victorian Cultural Industry*. London :Ashgate, 2014
- Gentleman's Magazine*. "Obituary of Remarkable Persons7." 69(1799), 628-629.
- . "Biographical Anecdotes of the late Mr. William Curtis," 69 (1799), 635-639.
- Kaufman, Paul. *Libraries and Their Users: Collected Papers in Library History*. London: Library Association, 1969.
- Lyon, John. "The 'Initial Discourse' to Buffon's Hitorie naturelle: The First Complete English Translation." *Journal of the History of Biology*, 9(1976): 133-181.
- Maxfield, Ezra Kempton. "Quaker "Thee" and Its History." *American Speech*, 1 (1926): 638-644.
- Milton, John. *Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. London: Longman, 1968.
- Mitton, G. E.(ed.). *Maps of Old London*. London: Adam and Charles Black, 1908.
- Noblett, William. "William Curtis's Botanical Library." *The Library*, Sixth Series, Vol. 9 (1987): 1-22.
- O'Brian, Patrick. *Joseph Banks: A Life*. Chicago: University of Chicago Press, 1987.
- Oxford Dictionary of National Biography*. Online edition. Oxford: Oxford University Press, 2004-15.
- Sloan, Phillip R. "The Buffon-Linnaeus Controversy." *Isis* 67(1976): 356-375.
- Waterhouse, Benjamin. "Botanist." *The Monthly Anthology*, Oct. 1805, 503-508.
- Willey, Basil. *The Eighteenth Century Background*. 1940; Boston: Beacon Press, 1961.
- Woudstra, Jan and James Hitchmough. "The Enamelled Mead: History and Practice of Exotic Perennials Grown in Grassy Swards." *Landscape Research*, 25 (2010): 29-47.

<Web>

- Biodiversity Heritage Library
<http://www.biodiversitylibrary.org/> 20150206
- Quaker Speak
<http://quakerspeak.com/> 20150303